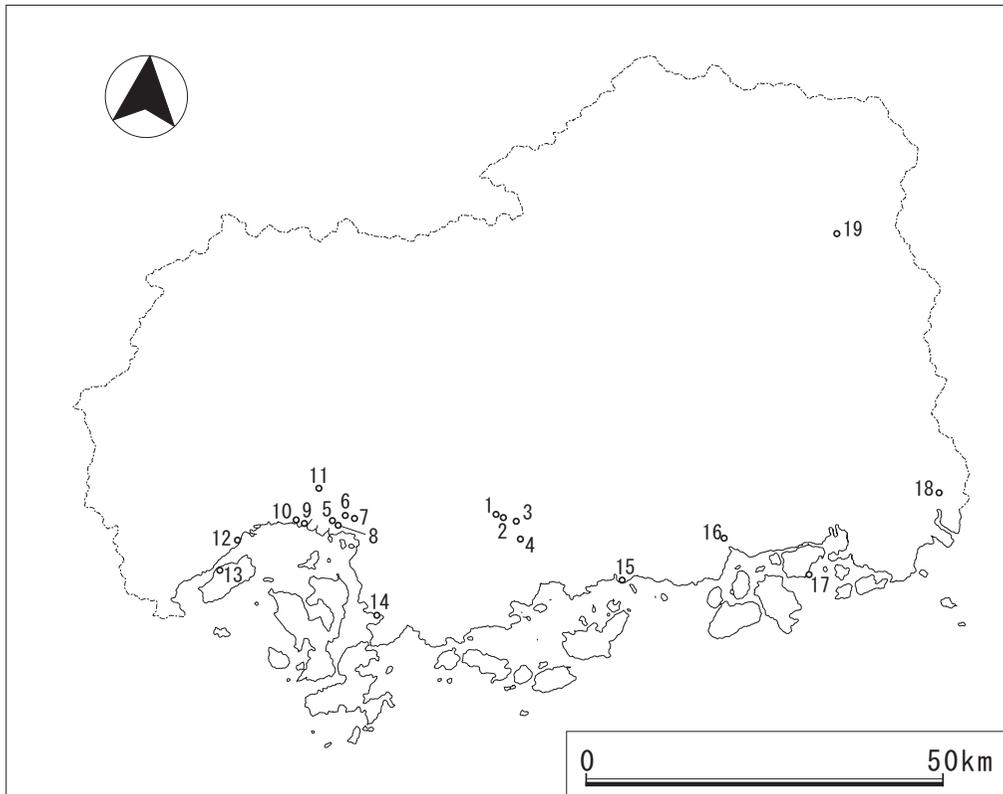


1. 開発に伴う協議と立会・試掘・発掘調査の概要（2016年度）

1. はじめに

広島大学が所管する広島県内の施設所在地は、本部キャンパスが位置する東広島市および統合移転する以前に本部キャンパスなどが所在した広島市を中心に広島県各地に分散しており、合計 27 か所を数える（大学・附属学校校舎等を中心とする敷地 7 か所、研究所等施設敷地 7 か所、課外活動施設敷地 4 か所、職員宿舍敷地 7 か所、その他 2 か所）。これら大学関連施設において 2016 年度に埋蔵文化財に関連した開発事業に伴って 49 件の協議を行った。また、東広島地区の遺跡保存整備が 4 件（うち 1 件は昨年度提出分）あり、



第 1 図 広島大学の校地所在地図（職員宿舍・その他を除く）

1. 東広島地区
2. サイエンスパーク地区
3. 西条三永地区
4. 下三永地区
5. 東千田地区
6. 霞地区
7. 東雲地区
8. 翠地区
9. 観音地区
10. 庚午南地区
11. 三滝地区
12. 廿日市地区
13. 宮島地区
14. 呉地区
15. 竹原地区
16. 三原地区
17. 向島地区
18. 春日地区
19. 帝釈未渡地区

第1表 2016年度（平成28）広島大学における開発に伴う埋蔵文化財協議・発掘届一覧

	件名	対象面積	協議書・発掘届提出日	対応
東広島地区				
1	東広島団地構内横断歩道道路標識設置工事 ^{※※}	約 0.3 m ²	2016年4月	工事
2	(生) 農場堆肥舎水栓柱取替工事	0.364 m ²	2016年5月	工事
3	ががら法面湧水処理工事 [※]	4.2 m ²	2016年5月	工事
4	(教) 講義棟 K1 南側舗装補修工事 [※]	6 m ²	2016年5月	工事
5	総合科学部北側階段手摺取設工事 [※]	約 1 m ²	2016年5月	工事
6	(国際研) 研究棟周辺排水樹補修工事	約 1.3 m ²	2016年6月	工事
7	(工) 実験研究棟 A4 スロープ取設等工事	約 36 m ²	2016年6月	工事
8	理学部南側法面梅・桜植樹業務	約 1 m ²	2016年6月	工事
9	北2 福利屋外排水管修理工事	4.5 m ²	2016年6月	工事
10	農場法面補修工事	33.6 m ²	2016年6月	工事
11	(生) 圃場フェンス補修その他工事	約 10.7 m ²	2016年7月	工事
12	農場法面等フェンス設置工事	約 1.6 m ²	2016年7月	試掘(立会)
13	構内歩道石積み補修工事	3 m ²	2016年7月	工事
14	ががら第一職員宿舎3号棟東側法面湧水処理工事	約 5.7 m ²	2016年7月	工事
15	サタケスクエア歩道補修工事 [※]	16.0 m ²	2016年7月	工事
16	園舎園庭不陸補修工事	210.0 m ²	2016年7月	工事
17	サタケメモリアルホール西側屋外階段補修工事 [※]	3.0 m ²	2016年8月	工事
18	思案橋下法面補修工事	14.6 m ²	2016年8月	工事
19	東西道排水樹補修工事	4.0 m ²	2016年8月	工事
20	ショベル実機試験	約 1000 m ²	2016年8月	工事(実験)
21	歯科診療所東側道路樹木植替業務	6 m ²	2016年9月	工事
22	山中会館陥没部埋戻し補修	1.2 m ²	2016年9月	工事
23	(総) K棟西側陥没部埋戻し補修	2.0 m ²	2016年9月	工事
24	学生プラザ西側道路等舗装補修 [※]	194.7 m ²	2016年11月	工事
25	環境整備陸上競技場槍投げ走路整備工事	約 110 m ²	2016年11月	工事
26	環境整備西グラウンド防球ネット整備工事	約 1.5 m ²	2016年11月	試掘(立会)
27	環境整備(総科西側道路)工事	2,136 m ²	2016年11月	工事
28	鴻の巣南遺跡復元住居改修工事	約 1.5 m ²	2017年1月	立会
29	山中池南遺跡第2地点須恵器窯跡改修工事	2 m ²	2017年1月	立会
30	鏡西谷遺跡整備芝張り工事	5,000 m ²	2017年1月	立会
31	ががら第一職員宿舎4号棟北側舗装等補修工事	約 19 m ²	2017年1月	工事
32	(教) 周辺歩道舗装補修工事	約 25.6 m ²	2017年1月	工事
33	北グラウンド表層整備工事	約 8320 m ²	2017年2月	工事
34	(総) 研究棟 A101 室実験排水等取設	約 22.5 m ²	2017年3月	工事

西条三永地区				
1	西条総合運動場井戸受水槽付近埋設給水管漏水修繕工事	3 m ³	2017年2月	工事
霞地区				
1	葉草園屋外給水管修理	約 1.2 m ²	2016年9月	工事
2	(霞) 研究棟B東側等道路舗装補修*	約 100 m ²	2017年2月	工事
3	(霞) 東ボイラー棟北道路補修	約 140 m ²	2017年3月	工事
東千田地区				
1	構内道路段差補修工事**	約 14 m ²	2016年5月	工事
2	集水桝・排水管移設工事	約 10.5 m ²	2017年2月	工事
翠地区				
1	売店基礎補修工事	0.8 m ²	2016年8月	工事
2	中・高食堂廻り東南舗装整備工事	約 83 m ²	2016年5月	工事
3	(翠) 附属中・高等学校休憩所	24.3 m ²	2017年1月	立会
東雲地区				
1	構内舗装補修	約 173 m ²	2017年1月	工事
三原地区				
1	小学校校舎昇降口耐震補強工事	約 94 m ²	2016年4月	立会
2	教生宿舍まわり屋外給水管修繕	約 39 m ²	2016年12月	立会
竹原地区				
1	実験研究棟外壁改修工事	約 4 m ²	2016年9月	工事
2	実験研究棟玄関給水管修繕工事	約 1 m ²	2017年2月	工事
向島地区				
1	受電設備等修繕	20 m ²	2017年1月	立会

件名の最後に*印を付したものは学内協議のみ、**印を付したものは大学外の事業者が開発原因者である

発掘届（文化財保護法第92条）3通、東広島地区、三原地区の開発工事に伴って発掘届（文化財保護法第92条）7通を提出した。このうち、東広島地区の東広島団地構内横断歩道道路標識設置工事は広島大学外の事業者（警察）が広島大学敷地の一部を借地し、施設等を設置するもので、広島大学外の事業者が工事主体である。また、東広島地区の北グランド表層整備工事については次年度に実施した。

本年度の開発事業については、協議回答等に基づき、11件について立会調査（合計14.0日）を実施した。開発事業は東広島地区が全体の約2/3を占めている。これに対応するように、立会調査は東広島地区が全体の半数を占めている（第1表）。立会調査件数で見ると、東広島地区6件（協議が不要な保存区フェンス設置工事の立会1件を含む）、

翠地区1件、三原地区2件、向島地区1件である。立会調査実施合計日数の実績で見ると、東広島地区5.0日(7回)、翠地区1.0日(1回)、三原地区6.0日(6回)、向島地区1回(1.0日)である(カッコ内は立会調査の回数)。本年度の調査では時期の明確な遺構・遺物の検出はほとんど見られなかった。

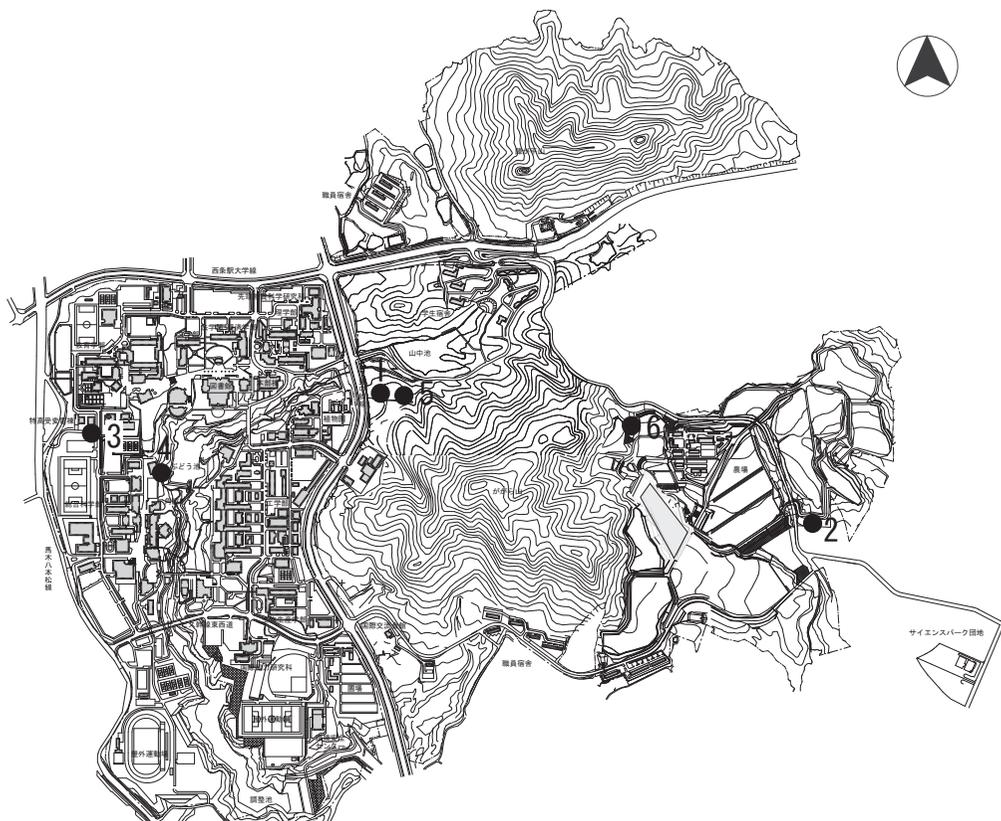
2. 試掘・立会調査の概要

次に、地区ごとに、試掘調査、立会調査の概要について述べる。

東広島地区(東広島市)

1) 山中池南遺跡第2地点移設遺構改修工事

所在地 東広島市鏡山二丁目812番62



第2図 2016年度東広島地区の調査位置図(縮尺1:20,000)

(1. 山中池南遺跡第2地点移設遺構改修工事、2. 農場法面等フェンス設置工事、3. 環境整備西グラウンド防球ネット整備工事、4. 鴻の巣南遺跡復元住居改修工事、5. 山中池南遺跡第2地点須恵器窯跡改修工事、6. 鏡西谷遺跡整備芝張り工事)

調査期間 2016（平成 28）年 4 月 25 日

調査面積 約 2 m²

調査者 藤野次史、大近美穂

調査概要 山中池南遺跡第 6 地点から山中池南遺跡第 2 地点に移築復元した 11 号土坑（SK 11）および立石状遺構（SX01）の改修工事である。SK 11 については移築した構成礫のうち、南側の 3 点が図面になく、配置した由来が不明であること、発掘調査で作成された礫出土状況平面図（縮尺 1/20）で遺構周辺の状況を検討したが、該当の礫が認められなかったことから、撤去することとした。SX 01 については、調査の際に作成した遺構実測図の方位が誤っていたことが判明したため、正しい方位に基づいた遺構復元を行うこととした。

SK 11 は、改修前の状況を写真で記録した後、南側 3 点の構成礫を順次撤去し、礫撤去部分の凹凸を整地した。

SX 01 は、改修前の状況を写真で記録した後、立石状の大型礫およびその下に位置する礫を掘りだして、隣接地へ仮置きした（写真 1）。礫を撤去した後の窪みは、一旦、埋め戻して平坦にした。次いで、SX 01 の復元掘り方の中央付近を通る南北線と発掘調査時の南北グリッド線を設定した（南北グリッド線は磁北から 34 度東に傾斜）。地表面に設定した南北グリッド線を使用して新たに SX 01 掘り方を復元した。掘り方上面の高さは SX 01 掘り方北東端を基準とし、レベルで掘り方の主要な部分の高さを確認しながら草削りで掘削し、一部盛土を行って、実測図に合わせて掘り方を復元した。掘り方は最も深い部分で地表下約



写真 1 山中池南遺跡第 2 地点移設遺構 SX 01 仮移動の様子

15 cm まで掘削した。次いで、立石状の大型礫の下に位置する礫、立石状の大型礫の順に掘り方内に設置した。実測図に基づき、平面位置はグリッド線を基準に計測、高さはレベルによって計測しながら設置した。最後に、掘り方内に少しずつ土を戻し、人力で填圧しながら、掘り方上面まで埋め戻した。掘り方上面のレベルを測定し、実測図に合うように高さを微調整した。

2) 農場法面等フェンス設置工事

所在地 東広島市鏡山二丁目 2965 番

調査期間 2016（平成 28）年 8 月 4 日

調査面積 約 1.6 m²

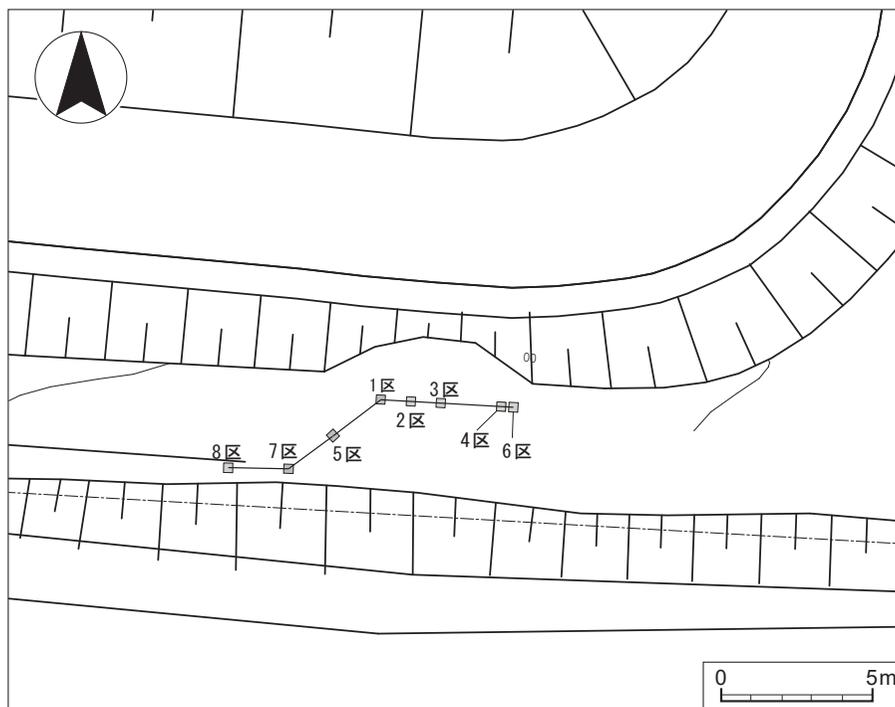
調査者 藤野次史

調査概要 広島大学農場法面等フェンス設置工事に伴って試掘（立会）調査を実施した。

調査対象地は、大学院生物圏科学研究科附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター西条ステーション（農場）の南西部で、フェンス設置に伴う掘削工事である。フェンス支柱基礎 8 基を設置するため掘り方を掘削し、掘削順に 1～8 区とした（第 3 図）。1～3 区は谷部分に位置し、4・6 区は東側の尾根西斜面、5・7・8 区は西側尾根東斜面～平坦部にあたる。1～3 区は近接して位置し、間隔は約 1 m である。4 区は 3 区の約 2 m 東に位置する。フェンスの高さとの関係から 4 区の東 0.4 m に近接して 6 区を掘削し、4 区は使用せず埋め戻した。5 区は 1 区の南西 2 m、7 区は 1 区－5 区延長線上にあり、5 区の南西 1.8 m に位置する。当初予定したフェンスの高さに達しないことから、7 区の西 2 m に 8 区を掘削した。

以下、各区の概要を説明する。

1 区 ネット基礎中もっとも低い場所に位置する。東西 0.4 m、南北 0.36 m の規模である。地表は西から東に向かって傾斜し、西端部で 0.35 m まで掘削した。上層より、表土層 (5cm)、



第 3 図 農場法面等フェンス設置工事（フェンスB）平面図（縮尺 1 : 250）
（灰色四角はフェンス支柱基礎掘り方を示す）



2-1 調査区全景（南より）



2-2 作業風景（東より）



2-3 4区完掘状況（南西より）



2-4 6区完掘状況（西より）

写真2 農場法面等フェンス設置工事に伴う調査

灰褐色砂質土（30cm）の堆積を確認した。

2区 1区の東に位置し、東側が高い斜面である。東西0.25m、南北0.3mの規模である。東端部で0.45mまで掘削した。上層より、表土層（10cm）、花崗岩地山の堆積を確認した。

3区 2区の東に位置し、東側が高い斜面である。東西0.25m、南北0.25mの規模である。東端部で0.45mまで掘削した。上層より、表土層（10cm）、花崗岩地山の堆積を確認した。

4区（写真2-3）2区の東に位置し、東側が高い斜面である。東西0.25m、南北0.3mの規模である。東端部で0.5mまで掘削した。上層より、表土層（5cm）、淡黄褐色砂質土（真砂土）（15cm）、花崗岩地山の堆積を確認した。

5区 1区の南西側に位置し、西側が高い斜面である。東西0.3m、南北0.3mの規模である。西端部で0.45mまで掘削した。上層より、表土層（5cm）、淡灰褐色砂質土（35cm）、花崗岩地山の堆積を確認した。

6区（写真2-4）4区の東側に位置し、東側が高い斜面である。東西0.35m、南北0.25

mの規模である。東端部で0.5 mまで掘削した。上層より、表土層（5cm）、淡灰褐色砂質土（10cm）、花崗岩地山の堆積を確認した。

7区 5区の南西に位置し、西側が高い斜面である。東西0.35 m、南北0.25 mの規模である。西端部で0.5 mまで掘削した。上層より、表土層（5cm）、淡黄褐色砂質土（真砂土）（30cm）、花崗岩地山の堆積を確認した。

8区 7区の西に位置し、西側が高い斜面である。東西0.25 m、南北0.45 mの規模である。基礎の位置を調整するため南側半分を深く掘り下げ、南西端部で0.4 mまで掘削した。上層より、表土層（5cm）、淡灰黄色砂質土（真砂土）（30cm）、花崗岩地山の堆積を確認した。

いずれの調査区でも、遺物、遺構とも発見されなかった。

3) 環境整備西グランド防球ネット整備工事

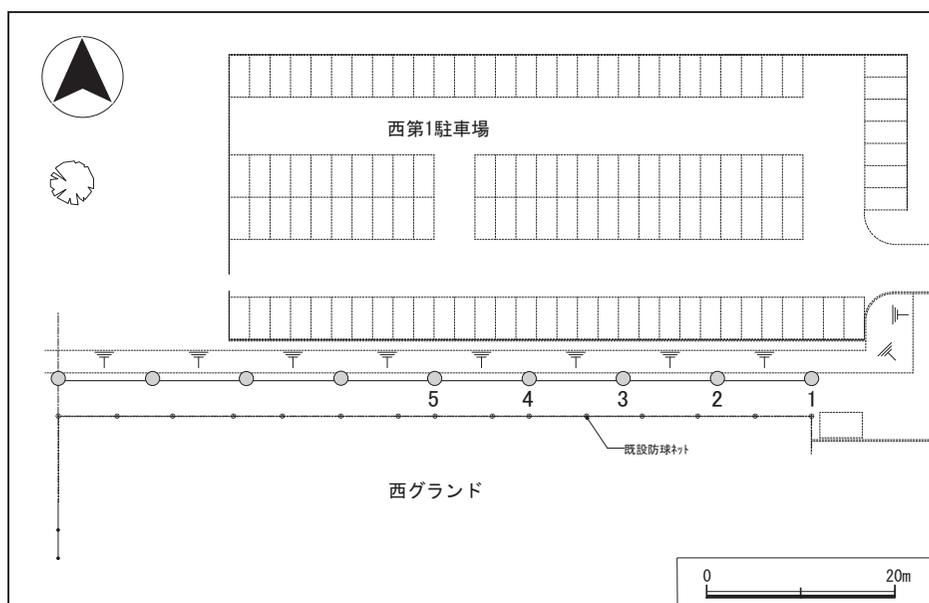
所在地 東広島市鏡山一丁目7番1号

調査期間 2017（平成29）年2月27日

調査面積 1.5 m²

調査者 藤野次史

調査概要 環境整備西グランド防球ネット整備工事に伴って試掘（立会）調査を実施した。防球ネット支柱は9本設置し、東から順に掘り方を掘削した。掘削順に1区、2区とし、



第4図 環境整備西グランド防球ネット整備工事平面図（縮尺1：800）

（灰色丸はフェンス支柱基礎掘り方を示し、数字は調査区番号である）

1～5区について調査した（第4図）。1～3区は広島大学の統合移転に伴う造成で旧地形が削平された可能性が高い地点、4区・5区は旧地形が残されている可能性のある地点で、4区は掘削範囲内に、5区は掘削範囲より深い部分に旧地形が残されている可能性がある地点である。

掘削は掘削用ドリルを使用して行った。ドリルは1度に1m程度を掘り下げ、一旦ドリルを引き上げて、掘り下げ土を排出した。掘り下げ途中での土層観察はできないので、排出された土を観察した。遺物等が確認されなければ作業を継続し、完掘後に掘削した掘り方内を観察し、堆積状況を確認した。堆積層は表土層を除くと、黄褐色系砂質土で、地表から目視した状況では分層は困難であった。2区（写真3-3）では地表下約1mで灰色粘質土ブロック、4区（写真3-4）では地表下約0.8mで褐色粘質土ブロックが包含されており、それらより上位の堆積層は複数の土がブロック状に混在する部分が観察された。

いずれの調査区でも遺物・遺構とも検出されなかった。各調査区の掘削範囲の堆積層



3-1 調査区全景（西より）



3-2 作業風景（西より）



3-3 2区完掘状況（西より）



3-4 4区完掘状況（西より）

写真3 環境整備西グランド防球ネット整備工事に伴う調査

は統合移転に伴う造成土と判断される。

4) 鴻の巣南遺跡復元住居改修工事

所在地 東広島市鏡山一丁目7番1号

調査期間 2017（平成29）年3月9日

調査面積 約1.5㎡

調査者 藤野次史

調査概要 復元住居改修に係る発掘調査

（再発掘）に伴って立会調査を実施した（普及・教育・研究活動報告編を参照）。



写真4 鴻の巣南遺跡復元住居改修工事掘削状況（北より）

5) 山中池南遺跡第2地点須恵器窯跡改修工事

所在地 東広島市鏡山二丁目812番62

調査期間 2017（平成29）年3月9日

調査面積 2㎡

調査者 藤野次史

調査概要 復元した1号須恵器焼成窯

跡前庭部南側の排水埋設管の改修に係る再発掘に伴って立会調査を実施した（普及・教育・研究活動報告編を参照）。



写真5 山中池南遺跡第2地点須恵器焼成窯跡改修工事盛土状況（北西より）

6) 鏡西谷遺跡整備芝張り工事

所在地 東広島市鏡山二丁目812番62

調査期間 2017（平成29）年3月9日・21日・22日

調査面積 5,000㎡

調査者 石丸恵利子

調査概要 保存区となっている鏡西谷遺跡の整備・活用のため、今後長期的な整備計画を作成して進めていくこととなった。当時検出された遺構は、調査時に出た掘削埋土のみで埋め戻されており、遺構面までの厚さは10から20cm程度だと考えられた。また、高まりの裾（現在の遊歩道の際）に土留めのための土嚢を並べるなどの処理しかしておらず、時間の経過とともに遺構面上部の土壌の流出が心配されていた。昨年度末に、遺跡の測量調査を実施した結果、D地区における土壌の流出は、遺構面までは達していなかったが非常に薄い状態であり、またF地区においては今後盛り土の必要があると思われる状況で

あった。

以上のことから、今後の整備計画の中で、今年度はこれ以上の土壌の流出を防ぐために、遺構面を保存した部分においては芝等を張って表面を保護することとした。今年度はD地区から年度内執行可能な予算の範囲内で250㎡の芝張りを実施した。段取りとしては以下のとおりである。また詳細は、普及・教育・研究活動編の2) 調査資料および遺跡の整備・管理において記す。

- ① シルバーによる草刈（地上面）
- ② 芝張り予定範囲の地下の伐根作業（重機と手作業）
- ③ 植え付け表面の整地
- ④ 施肥（緑化専用バーディーグリーン）
- ⑤ ティフブレア・シート20本の敷設

翠地区（広島市）

1) 附属中・高等学校休憩所

所在地 広島市南区翠一丁目1番1号

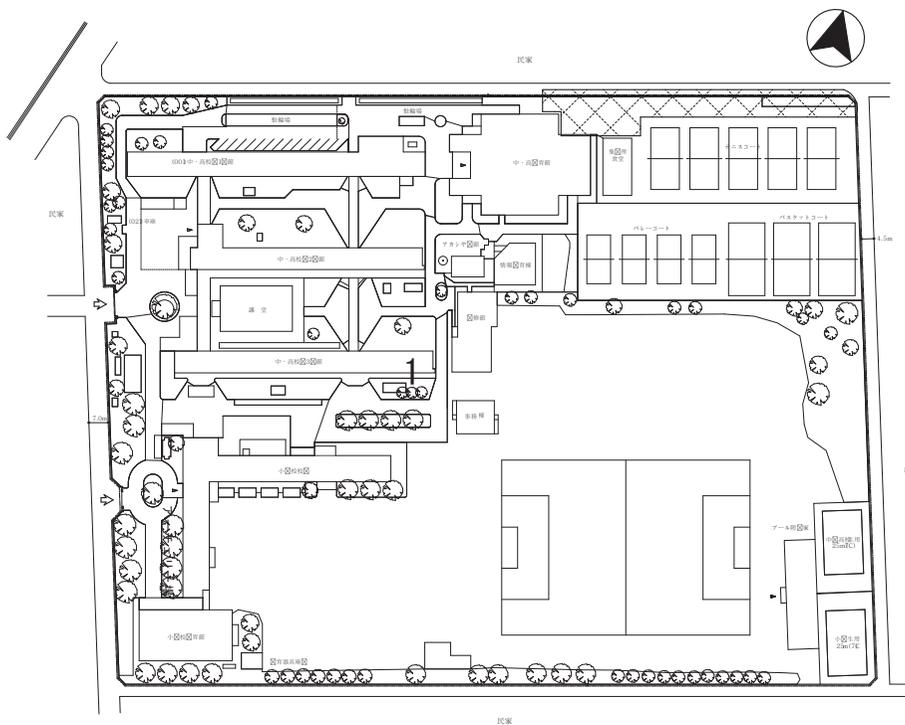
調査期間 2017（平成29）年2月22日

調査面積 24.3㎡

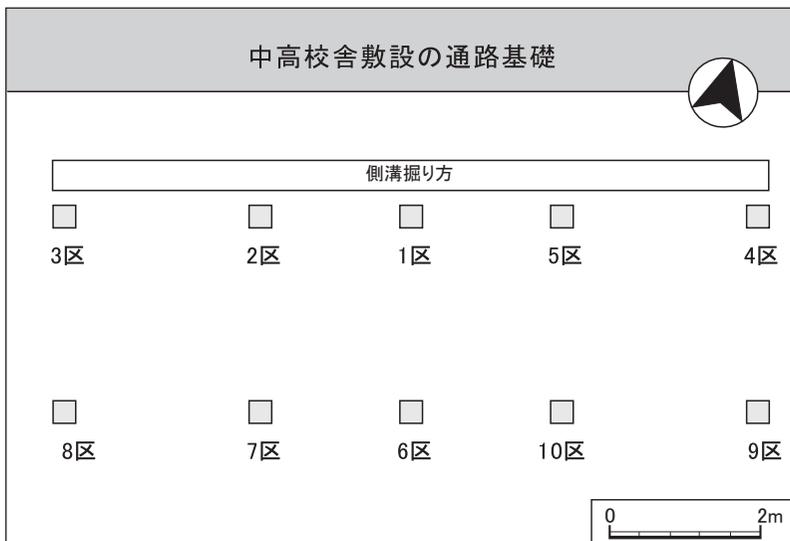
調査者 藤野次史

調査概要 附属中・高等学校休憩所設置に伴って立会調査を実施した。

休憩所屋根支柱掘り方および側溝掘り方を掘削した。休憩所屋根支柱基礎掘り方は10か所に設置し、掘削順に1区～10区とした（第6図）。掘り方は、平面約0.3m×0.3m、深さは0.5m前後の規模である。北側の支柱列である1～5区はすべて2011年度に実施した中高校舎3号館改修工事（藤野2011）の污水管・電気配管布設工事掘り方内である。2～5区では深さ約0.45mで給水管が露出したため、掘削を給水管上面でとどめた。1区は污水枿が位置していたため、わずかに南側にずらして掘削した。深さ約0.55mまで掘削した。2011年度の工事による掘削は深さ約0.45mまでで、それ以下はやや粘性のある暗褐色砂質土が堆積していた。南側の支柱列については配管等の設備の配置は認められず、6～9区では大きな地層の乱れは認められなかった。5～7枚程度に分層が可能であり、灰褐色系砂質土、橙褐色系砂質土を中心とする堆積層で、6区では木炭層、8区では木炭混じりの灰黒色砂質土が認められた。しかし、調査区ごとに堆積状態が異なり、各調査区の堆積層を対比するのは困難な状況であった。10区では地表下約0.35mまでに煉瓦、



第5図 2016年度翠地区立会調査位置図（縮尺1：3,000）
 (1. 附属中・高等学校休憩所工事)



第6図 附属中・高等学校休憩所調査区平面図（縮尺1：100）
 (灰色四角は屋根支柱掘り方を示す)



6-1 休憩所支柱掘り方(3区)掘削状況(北東より)



6-2 休憩所側溝掘り方掘削状況(北西より)



6-3 休憩所支柱掘り方3区完掘状況(西より)



6-4 休憩所支柱基礎掘り方8区完掘状況(東より)



6-5 休憩所支柱基礎掘り方9区完掘状況(南東より)



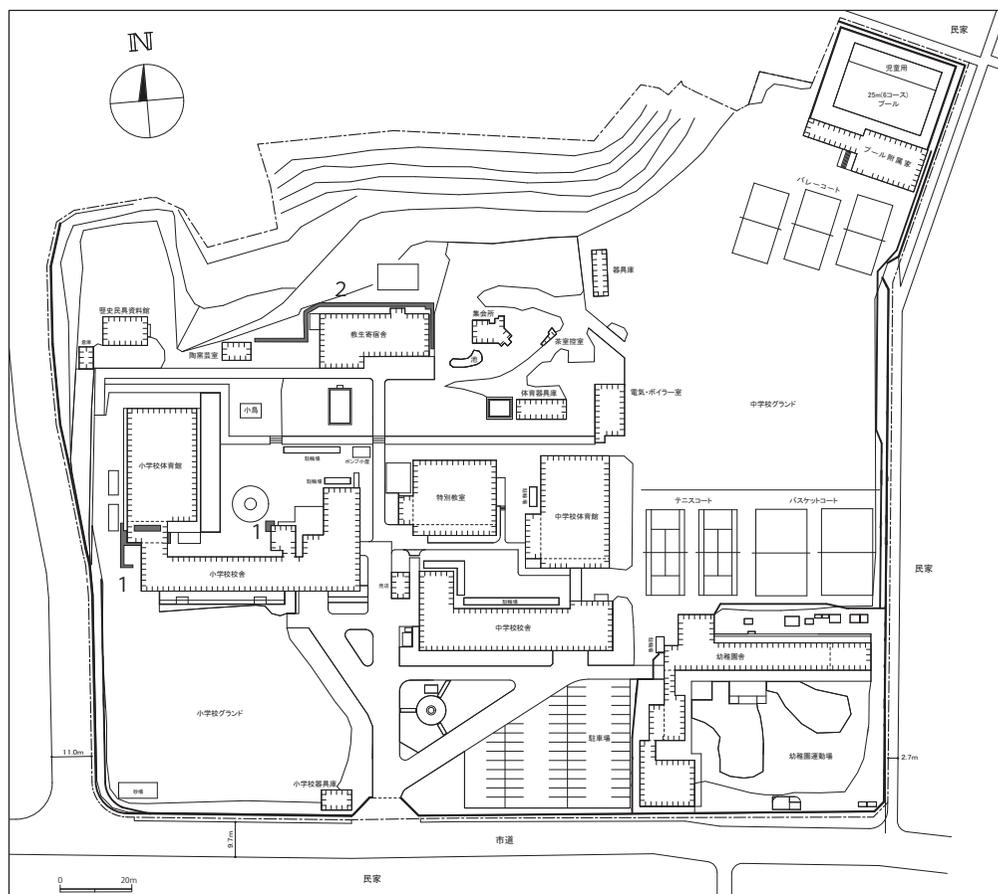
6-6 休憩所支柱基礎掘り方10区完掘状況(南より)

写真6 附属中・高等学校休憩所設置工事に伴う調査

コンクリート片が多く含まれていた。2011年度の工事の際に検出された建物基礎の東縁辺の延長線上に位置しており、建物基礎が削平されたことを示している可能性がある。

側溝掘り方は休憩所（東屋）北辺部に近接して位置し、幅約0.4m、長さ9.5m、深さ約0.3mの規模で掘削した。掘削部分はすべて2011年度の中高校舎3号館改修工事の污水管・電気配管布設工事掘り方内であり、掘り底では所々で污水管（塩ビ管）が露出した。

いずれの調査区でも遺構、遺物とも発見されなかった。



第7図 2016年度三原地区試掘（立会）調査位置図（1：約2,000）

（1. 小学校校舎昇降口耐震補強工事、2. 教生宿舎まわり屋外給水修繕）

三原地区

1) 小学校校舎昇降口耐震補強工事

所在地 三原市館町二丁目6番1号

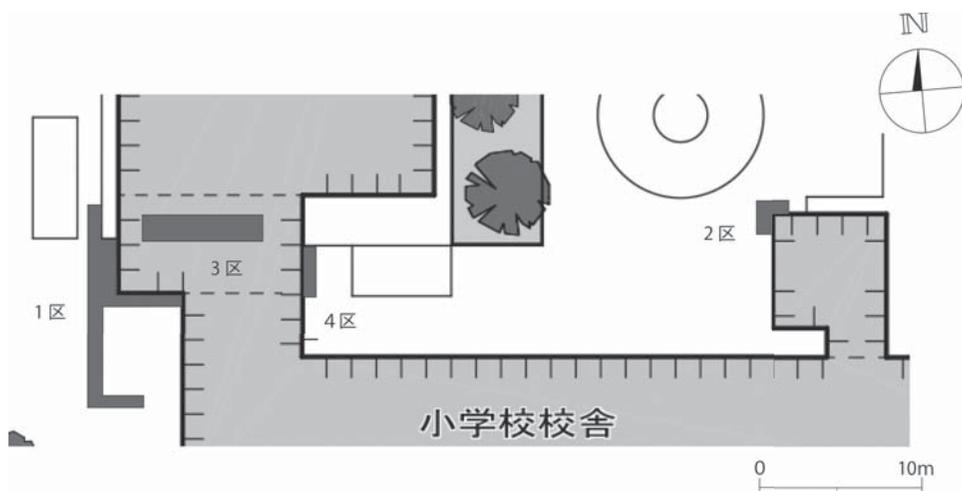
調査期間 2016（平成28）年5月14日、7月27日・28日

調査面積 約94 m²

調査者 石丸恵利子、大近美穂

調査概要 三原地区附属小学校校舎（体育館・校舎）昇降口の耐震補強工事が予定され、5月14日、建物基礎の深さを確認する試掘とコンクリート内部の鉄骨の状況を確認（掘削なし）するための作業が行われた。試し掘りは、小学校体育館南側入口の南西隅（昇降口A）と小学校校舎北側入り口の北西隅（昇降口B）で行われ、それに伴い立会調査をおこなった。

昇降口A（1区） 昇降口建物外側面の南西隅において南北方向に約1.6m、東西方向に約1.8mの範囲を掘削した。地表下約0.4mの地点で北北西から南南東方向に敷かれた土管が確認され、その上面レベルで建物の犬走りや捨てコンの下部が検出された。加えて、建物西側外側面に沿って、南西隅から幅0.5mでさらに北に約5mを掘削した。その結果、南西隅同様に基礎が浅いことが確認されたため、それ以上深く掘削は行わなかった。建物西側では、土管付け替えのため、既設管を撤去し、地表下0.5mまでを掘削した。掘削範囲内の東側壁面（建物側）で、犬走り約0.2m、捨てコン約0.05m、1層：暗い



第8図 小学校校舎昇降口耐震補強工事調査区平面図（1：450）

（濃い灰色部分は調査区、1～4区は調査区名）



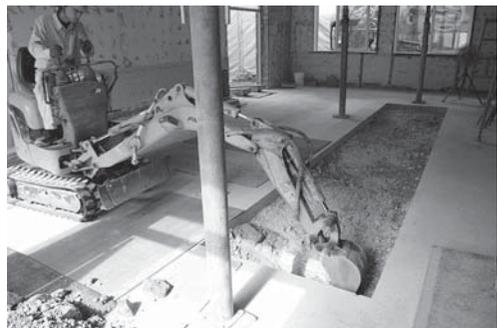
7-1 1区掘削後（南西より）



7-2 1区中央・西壁壁面（東より）



7-3 2区石列検出状況（北より）



7-4 3区掘削風景（東より）



7-5 3区西側南壁壁面（北東より）



7-6 4区掘削後北側（南東より）

写真7 小学校校舎昇降口耐震補強工事に伴う調査

褐色土約0.05 m、2層：黒灰から緑灰褐色土約0.1 m、3層：明るい黄褐色土（真砂土）約0.1 mの堆積が確認され、2層より近代と思われる磁器片1点が出土した。

昇降口B（2区）昇降口A同様に建物基礎の深さを確認するため、北西隅で東西方向に約2 m、南北方向に約2 mの範囲を地表下0.65 mまで掘り下げた。その結果、建物下

に花崗岩の切り石 2 個を確認した。西側の石は平らな面が北側に傾いた状態であったが、東側の石（東端は掘削範囲外に続く）は平らな面（上面・北側側面）が、ほぼ水平と垂直な状態であった。西側の石の南側（建物側）には、こぶし大から人頭大の角礫が複数確認された。石列の北側の埋土はやや粘質土であり、石列が溝の側石であった可能性が示唆され、複数の角礫は石列の裏込めの石の可能性も指摘できる。昇降口建設時、石を移動させず、そのまま上部に施工を行った可能性がある。掘削内での北壁面で堆積状況を確認したが、1 層：やや暗い褐色土（0.05 ～ 0.1 m）、2 層：暗い褐色土に礫を多く含む（0.2 ～ 0.4 m）、3 層：黒灰色に近い暗い褐色粘質土（0.15 ～ 0.2 m）の堆積が確認され、2 層もしくは 3 層の埋土より瓦片 1 点を採集した。東壁面の堆積から、石列に近い方が 3 層の堆積が厚く残されている状況がうかがえる。

試し掘りの結果、昇降口 A（体育館入り口）のみ耐震工事を実施することとなり、さらなる掘削は、7 月 27 日と 28 日に行われた。昇降口の西外側と南外側、内側（建物内部）、東外側の 3 か所で行われ、順に 1 区、3 区、4 区とする（2 区は試掘時の昇降口 B）。

1 区 試掘の際の再掘削と、雨水管付け替えおよび雨水桝新設のためにさらに北に 0.8 m の合計 6.3 m 分（昇降口南西隅から北に）を、建物西外側面から 0.9 m の幅で地表下 0.5 m まで掘削した。南西隅からさらに南方にある既設桝に接続するため、南に 5.6 m、東側に垂直に曲がって 3.0 m を、幅 0.7 m、深さ 0.65 m まで掘削した。また、昇降口南側についても扉前を幅 0.8 m、深さ 0.55 m まで掘削した。

建物南西隅からやや南方の西側壁面では、1 層：表土・黒褐色真砂土（0.1 m）、2 層：暗褐色土（0.1 ～ 0.15 m）、3 層：暗い灰色シルト＋緑灰色シルト層（最大 0.3 m）、4 層：赤褐色土（オレンジ真砂土）の堆積が確認でき、3 層下部に近代磁器片 1 点が含まれていた。すぐ北側で 4 層を掘り込んだ鉄管が埋設されており、3 層より上面はその上に堆積していることから新しい堆積層であることがわかる。その他、掘削埋土より瓦片 5 点と磁器片 1 点、貝殻片 1 点も採集した。

3 区 建物内部で北西隅から東へ 2.2 m、南へ 1.3 m の地点から、南北方向に幅 1.2 m、東西方向に長さ 6.6 m の部分をコンクリート床面から深さ 1.0 m までの掘削が行われた。層序は各壁面でやや異なるが、コンクリート床面＋捨てコン以下（コンクリート床面より 0.3 m 下）には、溝に堆積するような黒灰色＋暗い緑色粘質土の堆積が確認された。炭や竹、建物柱に使用した可能性のある角材などが含まれており、廃棄による堆積と考えられる。その上層はやや暗い黄褐色土の堆積を基本とする。

4 区 昇降口東外側の建物沿いの掘削で、東西方向に幅約 1.0 m、土間の南側から南

北方向に約 3.2 mを地表下 0.2 mまで掘削した。土管や塩ビ管の埋設が確認され、範囲内で遺構や遺物は確認されなかった。

以上の試掘および本調査の掘削によって、建物に接する場所にあたる 1 区・2 区・4 区は、昭和 42（1967）年の昇降口建設時の掘り方あるいは周辺の基幹整備等で掘削が行われている可能性が高いと考えられた。地表下 0.4 ～ 0.65 mを掘削した結果、建物基礎は浅く、昇降口建設の際に大規模な掘削は行われていないことが明らかとなった。昇降口 A・B はいずれも 1 階部分のみであることから、建物基礎は浅く、掘削は規模の小さなものであったと考えられる。掘削範囲内において、埋土より磁器や瓦片が検出されたが、いずれも近代以降のものと考えられる。また、1 区中央部分で土坑状の落ち込みが確認された。西壁面で層序を確認すると 3 層上面で南北 1.2 m、深さ 0.3 mを測り、埋土より近代のものと考えられる磁器片 1 点が出土した。掘削幅が 0.4 mであるため東西の規模は不明である。試掘のみであったが、2 区において石列（溝の側石か？）を確認した。今後の周辺調査においては注意が必要である。

また 3 区は、建物内部であることから昇降口建設の際には著しい掘削は行われていないと考えられたため、何らかの遺構が検出されることが期待された。コンクリート床面から 1.0 mの深さまで掘削が行われたが、北壁面で大型の落ち込み状の堆積を確認した。埋土上層は暗い黄褐色土で、下層は黒灰色から緑灰色の粘質土が混在した堆積中に、大小さまざまな大きさの礫や木片を多く含んでいた。東壁面近くでは上層と下層の境辺りに地下水脈があり、その部分の礫を取り除くと掘削場所に水が流れ込み、水浸しとなったため、ポンプで排水しながらの掘削となった。溝あるいは小川が流れていた可能性もあるが、いずれにしても上下層は、意図的に埋められた埋土だと考えられる。時期を示すような遺物が含まれていなかったため時期は不明であるが、木質材は附属小学校建設前の広島県三原女子師範学校や三原小学校あるいはそれ以前の建物に使用された部材である可能性もある。

以上のことから、本調査においては三原城・三原城下町遺跡にかかわる遺構・遺物は検出されなかった。ただし、試掘の際に 2 区で原位置をとどめている可能性のある石列が検出されたことから、今後の調査には注意を要したい。

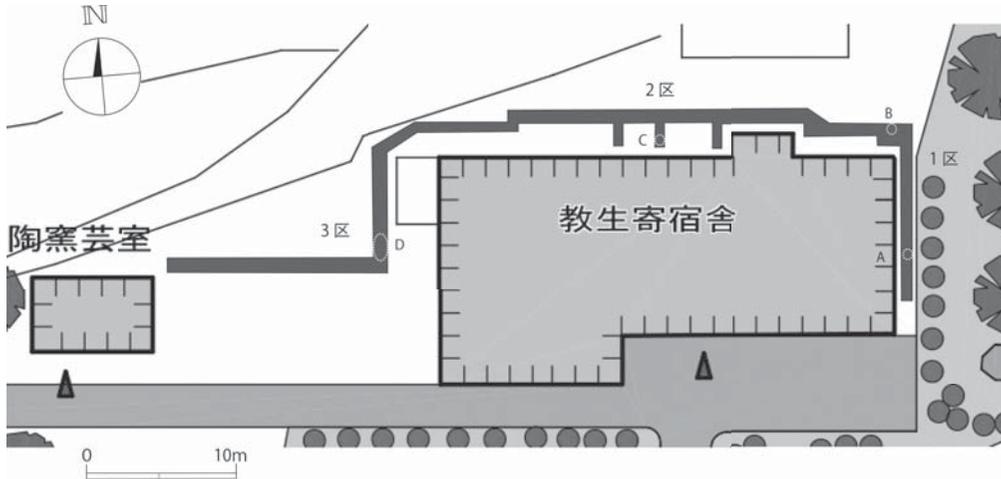
2) 教生宿舍まわり屋外給水修繕

所在地 三原市館町二丁目 6 番 1 号

調査期間 2017（平成 29）年 3 月 6 日～3 月 8 日

調査面積 約 39 m²

調査者 石丸恵利子



第9図 教生宿舎まわり屋外給水修繕調査区平面図 (1 : 500)

(濃い灰色部分は調査区、1～3区は調査区名)

調査概要 三原地区教生宿舎まわり屋外給水管修繕に伴う掘削が予定され、工事に立ち会い地下の堆積状況の確認調査を行った。建物まわりの既設給水管を付け替えるため、東側の給水栓から埋設された管を追って掘削を開始した。建物の東側を1区、北側を2区、西側を3区とした。

1区 掘削幅0.4～0.6mで南北方向に約10mを深さ0.5mまで掘削した。既設の鉄管の水道管上部の高さまでの掘削であり、鉄管の除去にはそれ以上の掘削は行わず、工具を使用して人力で取り上げ、上面をならしてその上に塩ビの新しい水道管を設置した。設置の前に土壤の堆積を確認した。配管の深さまではすべて埋土で、一部ブロック状に真砂土や黒灰色土、緑灰色土を確認した。東側壁面で1層：暗い褐色砂質土でしまりが緩い(地表下0.2から0.3m)、2層：より暗い茶褐色土と明るい褐色土がまだらに混じる、やや粘性があるしまった堆積で、こぶし大の角礫や円礫(河原石)を含む堆積(0.2m前後)、3層：緑色粘質土がまだらに混じる褐色土(0.05から0.1m)で、一部、鉄管を取り除いた床面に花崗岩が風化したような面がA地点で、また明るい黄褐色真砂土がB地点で確認された。掘削の範囲が狭小であるため断定は難しいが、B地点の堆積は地山の可能性がある。遺物・遺構は検出されなかった。

2区 0.4から最大1.0m幅(既設管を追って掘削したため、掘削幅は前後する)で、1区の続き教生宿舎の北東隅から北西隅まで約36mを深さ0.35から0.5mまで掘削した。途中3か所で、建物に引き込まれている給水管の上面を追って掘削した(計約5m分)。



8-1 1区南端完掘状況(南より)



8-2 2区東端掘削状況(西より)



8-3 2区中央部西寄り完掘状況(東より)



8-4 3区東側地山面検出状況(南より)

写真8 教生宿舎まわり屋外給水修繕に伴う調査

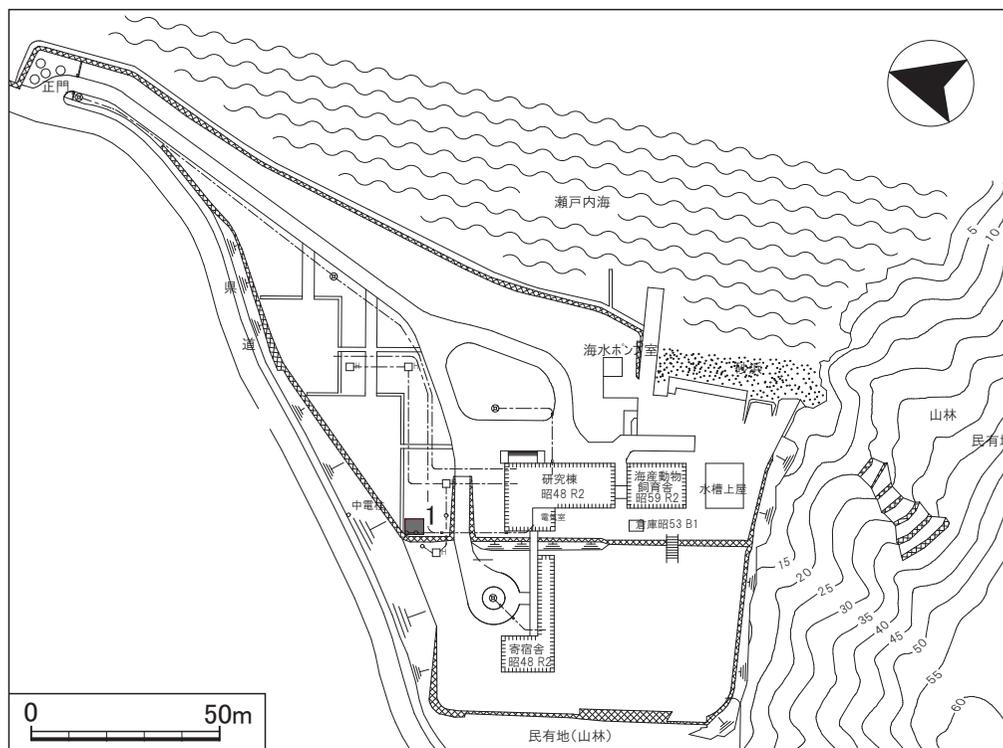
うち1か所で管下に真砂土、さらにその下部に炭を含みやや粘性がある硬くしまった黒色砂質土の広がりを見ながら確認した(C地点)。北東側の掘削埋土より、磁器片や陶器片を、また北西側の掘削埋土より磁器片と陶器片を採集した。遺構等は確認されなかった。

3区 宿舎の北西隅から既設の水道管は北側の山際を西方向に設置されているが、山際には腐葉土が集積され1m以上厚く堆積しているため、外階段の西側を南方向に約10m南下した場所で、さらに西側に約13m延ばして陶窯芸室北東隅の既存の水道蛇口まで接

続させることとし、そのルートで幅約 0.4 m で深さ 0.4 から 0.5 m まで掘削を行った。南北方向から東西方向へと折れ曲がる付近で、南北方向約 1.2 m の範囲で地表下 0.4 m の地点で黄褐色真砂土の広がりを確認した (D 地点)。真砂土で硬くしまっており、地山の可能性がある。遺構・遺物は検出されなかった。

まとめ

掘削範囲内の 1 区と 2 区においては、すべて既設の水道管設置時の埋土であり、遺構は確認されなかった。採集された遺物は近代以降のものと考えられる。この度調査が行われた場所は、桜山の南際にあたり、この場所がいつの時代からどのように利用されたのかを知るための情報が得られるかが期待されたが、それらの明確な証拠となる遺構などは検出されなかった。ただ、いくつかの場所で、地山と考えられる層が地表下 0.4 m ほどで確認され、厚い包含層は堆積していないであろうことが明らかとなった。今後も附属小中学校構内での掘削を伴う工事においては、三原城跡の範囲とされている山際の土地利用の変遷を含め、敷地全体での地下堆積の情報を得ることに努めたい。



第 10 図 2016 年度向島地区立会調査位置図 (縮尺 1 : 2,000)

(1. 受電設備等修繕)

向島地区（尾道市）

1) (向島) 受電設備等修繕

所在地 尾道市向島町 244

調査期間 2017（平成 29）年 3 月 2 日

調査面積 20 m²

調査者 藤野次史

調査概要 広島大学（向島）受電設備等修繕に伴って立会調査を実施した。

電柱の電気抵抗を下げるためにアースおよびアース間をつなぐ配線を埋設する工事であり、それに伴ってアース掘り方、配線掘り方を掘削した（第 11 図）。作業は、電気抵抗が規定値に達するまで順次アースと配線を設置した。最終的にアース掘り方 8 か所、配線掘り方 5 か所（アース掘り方間の直線部分）を掘削した。アース掘り方は電柱隣接部から掘削を行い、1 ～ 1.5 m 間隔で設置し、掘削順に No.1 ～ No.8 アース掘り方と呼称した。

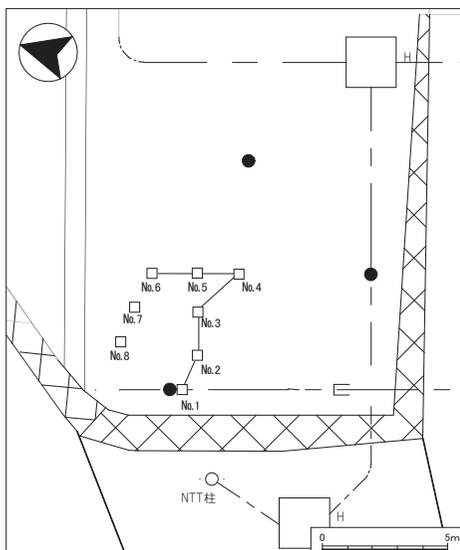
掘削部のすべてにおいて花崗岩地山を確認した。地山上面は、東西方向では西から東に向かって、南北方向では、北西から南東に向かって深くなっていた。地山の地表からの深度は、東端部の No.4 アース掘り方付近を除くと、深さ 45cm より浅い位置にあった。調査区西端は垂直に近い壁面であり、旧地形を削平したと推定されること、調査区内で花崗

岩風化土や花崗岩に由来する堆積層が認められないこと、堆積層中にビニール紐などが含まれていることなどから、調査区全域の旧地形が削平されているものと判断された。また、出土遺物、遺構も確認されず、包含層と判断できるような堆積層も認められなかった。

次に、各調査区の概要を述べる。

No.1 アース掘り方 電柱南隣接に位置する。30cm × 40cm の規模で、深さ約 80cm まで掘削した。上部はコンクリート、下部は電柱掘り方埋土であった。基本的に電柱掘り方埋土で充填されていたが、南壁において地表下約 5cm で地山（花崗岩）を確認した。

No.1・No.2 アース間配線路掘り方 東西方向の配線路掘り方で、幅約 50cm、長さ約



第 11 図 受電設備等修繕工事調査区平面図（縮尺 1 : 300）

（□はアース掘り方、No. は掘り方番号、□の間の直線は配線路掘り方●は構内電柱である）

160cm、深さ約 45cm の規模で掘削した。表土層（約 5cm）、暗灰褐色砂質土（厚さ約 30cm）の下に地山が認められた（地表下約 35cm）。

No.2 アース掘り方 No.1 掘り方東側のアース掘り方である。50cm × 50cm の規模で、深さ約 80cm まで掘削した。アース掘り方は大半が既設配管の掘り方内であり、堆積層は配管掘り方埋土であった。

No.2・No.3 アース間配線路掘り方 東西方向の配線路掘り方で、幅約 25cm、長さ約 130cm、深さ約 45cm の規模で掘削した。堆積層は、後述の No.3 アース掘り方と同様である。

No.3 アース掘り方 No.2 掘り方東側のアース掘り方である。35cm × 40cm の規模で、深さ約 80cm まで掘削した。表土層（約 2～5cm）、黄灰褐色砂質土（厚さ約 30cm）の下に地山が認められた（地表下約 32cm）。

No.3・No.4 アース間配線路掘り方 東西方向の配線路掘り方で、幅約 25cm、長さ約 100cm、深さ約 45cm の規模で掘削した。堆積層は、表土層（約 15cm）、黄灰褐色砂質土（厚さ約 37cm）、花崗岩地山で、調査区中程から南側では黄灰褐色砂質土と花崗岩の間に暗灰色砂質土の堆積が認められ、花崗岩地山は東に向かって次第に深くなっていた。

No.4 アース掘り方 No.3 掘り方東側のアース掘り方である。40cm × 65cm（中心部分は 30cm × 40cm）の規模で、深さ約 80cm まで掘削した。表土層（約 15cm）、黄灰褐色砂質土（厚さ約 37cm）、暗灰色砂質土（厚さ約 30cm）の下に地山が認められた（地表下約 80cm）。

No.4・No.5 アース間配線路掘り方 南北方向の配線路掘り方である。幅約 30cm、長さ約 105cm、深さ約 40cm の規模で掘削した。表土層（約 10cm）、黄灰褐色砂質土（厚さ約 30cm）の下に地山が認められた（地表下約 40cm）。

No.5 アース掘り方 No.4 掘り方北側のアース掘り方である。40cm × 40cm の規模で、深さ約 80cm まで掘削した。表土層（約 10cm）、黄灰褐色砂質土（厚さ約 30cm）の下に地山が認められた（地表下約 40cm）。

No.5・No.6 アース間配線路掘り方 南北方向の配線路掘り方である。幅約 30cm、長さ約 165cm、深さ約 35cm の規模で掘削した。表土層（約 10cm）、黄灰褐色砂質土（厚さ約 30cm）が認められたが、黄灰褐色砂質土の堆積が認められるのは No.5 アース掘り方隣接部のみで、その北側は表土下に地山が認められた（地表下約 10～15cm）。

No.6 アース掘り方 No.5 掘り方北側のアース掘り方である。50cm × 50cm の規模で、深さ約 35cm まで掘削した。表土（約 22cm）下は花崗岩地山である。

No.7 アース掘り方 No.6 掘り方西側のアース掘り方である。40cm × 40cm の規模で、深さ約 60cm まで掘削した。表土（約 15cm）下は花崗岩地山である。



9-1 受電設備等修繕掘削状況（北東より）



9-2 No.4 アース掘り方完掘状況（北東より）



9-3 No.5 アース掘り方および周辺部配線掘り方完掘状況（北西より）



9-4 No.7 アース掘り方完掘状況（東より）

写真 9 向島地区受電設備等修繕に伴う調査

No.8 アース掘り方 No.7 掘り方西側のアース掘り方である。50cm × 40cm の規模で、深さ約 35cm まで掘削した。表土（約 10cm）下は花崗岩地山である。

3. 小 結

2016 年度は、東広島地区 6 件、翠地区 1 件、三原地区 2 件、向島地区 1 件の立会、試掘（立会）調査を実施した。いずれの調査においても時期が確定できる明確な遺構は検出されなかった。なお、三原地区小学校校舎昇降口耐震補強工事 2 区検出の石列は、時期は不明であるが、原位置をとどめており、今後の調査で遺構の広がりや遺構の時期などを明らかにしていきたい。

引用文献

藤野次史 2015 「開発に伴う協議と立会・試掘・発掘調査の概要（2011）」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第 6 号、広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門、135～164 頁。